

## 大学生の洗濯行動の実態と課題

木村美智子\*

(2015年9月15日受理)

### A Study on the Conscious Behavior of University Students about Home Laundry

Michiko KIMURA

キーワード: 大学生, 家庭洗濯, 自立した洗濯, 新型洗剤, 柔軟剤

近年、洗剤や洗濯機の種類・機能が多岐にわたる中で、洗濯に対する大学生の意識や行動を把握することは、これからの消費者教育・家庭科教育を考える上で重要な視点である。本研究では、新たな家庭洗濯のスタイルにふさわしい消費者教育・家庭科教育を構築するための基礎的データを得ることを目的として、教育学部の2年生を対象として質問紙調査を実施した。その結果、大学生は小中高校の家庭科を通して洗剤や洗濯に関する知識や関心はあるが、自立した洗濯行動に結びついていないことが明らかとなった。この背景には、家庭科の実習・実験で洗濯を取り上げる機会が少ないことが関与しているのではないかと推察された。

### はじめに

家庭洗濯の省資源・省エネルギー化を目指した技術開発に伴い、洗剤や洗濯機の種類・機能が多岐にわたっている。洗剤については、漂白剤や柔軟成分の含有、超濃縮タイプ、部屋干し対応、環境対応等の性能が付与され、粉末・液体・ジェルボール等の形態を含めると、非常に多種類の洗剤が市販されている。柔軟剤についても、最近では香り付けを重視する商品が主流となっている。こうした変化は、消費者の洗濯に関する知識や意識、行動に大きく影響していると考えられ、日本石鹼洗剤工業会(2013)の調査では、消費者の洗濯行動が変容していることが報告されている。

大学生は、小学校および中学校家庭科では「日常着の手入れ」、高校家庭科では「被服管理」の分野を通して、洗濯や洗剤に関する知識を身につけている。柔軟剤や漂白剤などの洗濯仕上げ剤の学習は、高校家庭科で行われてきているが、菊池・生野(2014a、2014b)は中学校家庭科で取り上げる必要性を指摘している。その背景には、洗剤のみならず、柔軟剤や漂白剤の使用が増えてきて

---

\*茨城大学教育学部 (College of Education, Ibaraki University)

いることが挙げられる。大学生や社会人になって1人暮らしをする中で、初めて自分で洗濯をするという人も多いのではないだろうか。一般的には、高校までに得た知識や経験に基づき、洗濯を行っているのが現状だと考えられる。そこで、本研究では、大学生の洗剤に関する知識や洗剤購入時の意識が洗濯行動にどのような影響を与えているかを分析し、新たな家庭洗濯のスタイルにふさわしい消費者教育・家庭科教育を構築するための基礎的データの蓄積を目的とする。

## 研究方法

### 1. 調査概要

茨城大学教育学部の2年生を対象として2015年2月に質問紙調査を実施し、106名（男子学生29名、女子学生77名）から回答を得た。表1に示すように、調査票は、属性、洗濯関連知識、洗剤購入時の意識、洗濯行動に関する質問から構成されている。属性では、性別、家族形態（現時点で同居している家族構成）、主に洗濯をしている人、洗濯に関する校種別（小学校、中学校、高校）の学習内容とした。洗濯関連知識では、洗剤の特性、洗浄作用、洗剤使用量と洗浄力の関係、柔軟剤の役割などの質問項目を設定した。洗剤を選択し購入する時に意識する項目として、価格、汚れ落ち、香り、抗菌防臭、洗剤成分、使用量、洗濯物の傷み、肌にやさしい、環境にやさしい、すすぎ1回について、どの程度意識しているかを質問した。洗濯行動では、洗濯時の留意点、洗濯機の設定、柔軟剤使用について質問を設定した。

表1 調査項目

属性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・性別, 年齢, 家族形態(現在同居している家族構成)</li> <li>・主に洗濯をしている人(自分自身, 家族)</li> <li>・家庭科で学んだ洗濯に関する学習経験の有無(小中高の校種別)と学習内容</li> </ul>
洗濯関連知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洗濯物の仕分け</li> <li>・洗剤使用量と洗浄力</li> <li>・界面活性剤の働き</li> <li>・柔軟剤・漂白剤の特性</li> <li>・アイロンの設定温度</li> </ul>
洗剤購入時の意識	<p>価格が安い／汚れ落ちがよい／香りがよい／抗菌防臭効果／洗剤の成分／使用量が少ない／洗濯物の傷みが少ない／肌にやさしい／環境にやさしい／すすぎ1回ですむ</p> <p>⇒1点(気にしない)      2点(あまり気にしない)          3点(ある程度気にする)      4点(非常に気にする)</p>
洗濯行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洗濯の頻度, 時間帯, 使用している洗濯機の種類, 洗剤の種類</li> <li>・洗濯時に気をつけていること                  ⇒気にしない, 洗濯物の量, 水量, 洗剤使用量, 仕分け</li> <li>・洗濯機の設定                  ⇒洗濯機まかせ, 洗剤容器の表示に合わせる, 洗濯物の量に合わせる, わからない</li> <li>・柔軟剤使用の有無と使用頻度 (毎回使用, よく使用, たまに使用)</li> </ul>

## 2. 分析の視点

洗濯行動として設定した「洗濯する時に気をつけている項目数（洗濯物の量・水量・洗剤使用量・仕分け）」および「洗濯機の設定（使用する水の種類・水量）」に対して、「属性（性別、誰が洗濯をしているのか、小・中・高の家庭科の学習）」や「洗濯に関する知識」、「洗剤購入時の意識」の影響を分析した。

### 結果および考察

#### 1. 調査対象者の特徴

対象学生は、全体では1人暮らしが49%、家族と同居が51%である。1人暮らしの場合、男子学生ではその割合が高く86%、女子学生では35%の割合である（表2）。

表3に示すように、自分で洗濯している学生は54%、このほとんどは1人暮らしをしている学生である。家族と同居している学生が自分で洗濯するケースは少ないことがわかる。一方、家族が洗濯しているのは全体の46%であるが、その主体はほとんどが母親であった。

家庭科では、「衣服の手入れや洗濯」を取り上げているが、その学習経験を調べた結果を表4に示す。家庭科で洗濯を学習した経験は、全体としては、「小学校でのみ学んだ」と回答する割合よりも「小・中・高校すべての家庭科で学んだ」と回答する割合が高い。家庭科の男女共修は、中学校（1993年から）、高校（1994年から）で実施されていることから、回答結果に性別による有意差は認められなかった。

表2 対象学生の居住形態

男	29名	1人暮らし	25名(86%)	} 全体では	1人暮らし	52名(49%)	
		家族と同居	4名(14%)				家族と同居
女	77名	1人暮らし	27名(35%)				
		家族と同居	50名(65%)				

表3 誰が洗濯をしているのか

自分で洗濯	男	24名(1人暮らし24名)
	女	33名(1人暮らし27名)
57名(54%)		
家族が洗濯	男	5名(母親が洗濯3名)
	女	44名(母親が洗濯36名)
49名(46%)		

表4 家庭科で洗濯を学んだ経験(校種別)

	小学校家庭科	小・中学校家庭科	小・中・高校家庭科	計
男	5名(24%)	9名(43%)	7名(33%)	21名(100%)
女	12名(20%)	23名(36%)	29名(45%)	64名(100%)
計	17名(20%)	32名(38%)	36名(42%)	85名(100%)

注)回答者85名中、男女で有意差なし

## 2. 洗剤や洗濯に関する知識と洗剤購入時の意識

### 2-1 知識について

小・中・高校の家庭科で学習する洗剤や洗濯に関連する知識、主として、洗濯物の仕分け・洗剤使用量と洗浄力・界面活性剤の働き・仕上げ剤の特性・アイロンの設定温度、などについて質問し、正解のみを1点として合計点を算出した。

知識(平均値)と、学生の属性<性別、誰が洗濯をしているのか、家庭科の学習経験(校種別)>との関係をまとめたのが表5である。T検定の結果、知識と属性との間には有意差は認められなかった。

表5 学生の属性と洗剤や洗濯に関する知識との関係

	知識平均値	有意差
男	5.24	なし
女	5.60	
自分で洗濯	5.60	なし
家族が洗濯	5.39	
小・家庭科	5.18	なし
小・中学校家庭科	5.25	
小・中・高校家庭科	5.86	

### 2-2 意識について

洗剤を購入する時に意識する10項目について、どの程度、重視するかを4点法で質問したところ、重視率(重視する、ある程度重視する、を選択した合計)を求めた結果を表6に示す。8割以上の学生が重視する項目は、「汚れ落ちがよい、香りがよい、価格が安い」であった。一方、「洗剤成分、使用量が少ない、すすぎ1回で済む」を重視する割合は5割以下であった。

意識に関する10項目について因子分析を行った結果、2つの因子が抽出され、それぞれ、<洗剤性能因子>と<環境・安全因子>と名付けた(図1)。表5の結果と合わせて考察すると、学生は、洗剤を購入する際に、環境や安全性よりも、洗剤の性能を重視して購入していると考えられる。

<洗剤性能因子>および<環境・安全因子>と、学生の属性<性別、誰が洗濯をしているのか、家庭科の学習経験(校種別)>との関係についてまとめたのが表7である。T検定の結果、属性との間に有意な関係は認められなかった。

洗剤購入時の意識

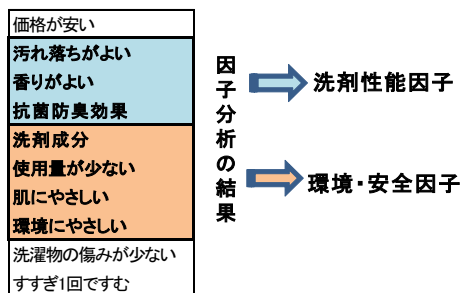


図1 洗剤購入時の意識(因子分析の結果)

表6 洗剤購入時の意識—各項目における重視率—

項目	重視率(%)
汚れ落ちがよい	85.8
香りがよい	84.0
価格が安い	81.1
抗菌防臭効果	71.7
洗濯物の傷みが少ない	60.4
肌にやさしい	56.6
環境にやさしい	50.9
使用量が少ない	45.3
洗剤の成分	44.3
すすぎ1回で済む	39.6

表7 洗剤購入時の意識と属性との関係

	環境および安全性に係わる因子	洗剤性能に係わる因子	有意差
男	-0.024	-0.162	なし
女	0.009	0.064	
自分で洗濯	0.016	0.032	なし
家族が洗濯	-0.018	-0.035	
小・家庭科	-0.271	-0.239	なし
小・中学校家庭科	0.010	-0.072	
小・中・高校家庭科	0.183	0.323	

### 3. 大学生の洗濯行動

#### 3-1 洗濯時に気をつけている項目について

「洗濯物の仕分け・洗濯物の量・水量・洗剤使用量・すすぎの回数」の5項目について、洗濯時に気を付けている項目を全て回答してもらい、その平均値を算出した。「気にしていない」と回答した学生は約2割であった。表8に、項目数の平均値と学生の属性<性別、誰が洗濯をしているのか、家庭科の学習経験(校種別)>との関係についてまとめた。T検定の結果、性別および家庭科の学習経験(校種別)において、有意差が認められた。すなわち、性別との関係では、女子学生の方が男子学生に比べて、洗濯時に気をつける項目数平均値が有意に高いことがわかった( $p < 0.01$ )。家庭科の学習経験では、小・中・高校 > 小・中学校 > 小学校、の順番で項目数平均値が有意に高かった( $p < 0.05$ )。誰が洗濯をしているのかは関与していなかった。

洗濯機で水量を設定する際に、「洗濯機まかせ(自動洗濯)」にするのか、それとも「洗剤容器の表示や洗濯物量に合わせる」のかについて、 $\chi^2$ 検定を用いて学生の属性との関係を調べた結果、性別や誰が洗濯をしているのか、の関与は認められなかった。これに対し、表9に示すように、「小・中・高校までの全ての家庭科」で学習した経験のある学生は、洗剤容器の表示や洗濯物量に合わせて水量を設定する割合が高く、洗濯機まかせにする割合が少ないことがわかった( $p < 0.01$ )。

大学生の洗濯行動の指標として考えた、「洗濯時に気をつけている項目数」および「洗濯水量の設定方法」に対して、「洗剤や洗濯に関する知識」、「洗剤購入時の意識」が、どのように関わっているかを相関分

析や回帰分析で検討したが、明確な関係性は認められなかった。

以上のことより、大学生が自分で考え工夫して適切な洗濯を行う「自立した洗濯行動」には、自分で洗濯しているかどうかよりも、「小・中・高校までの全ての家庭科」で学習した経験や「性別の違い(女子学生)」が関与していることが推察された。自立した洗濯行動に知識が関与していなかった背景には、家庭科の授業で洗濯の実習・実験を取り上げる機会が少ないことが影響しているのではないかと推察される。

表8 洗濯する時に気をつけている項目数(平均値)

	項目数平均値	有意差
男	0.759	p<0.01
女	1.468	
自分で洗濯	1.351	なし
家族が洗濯	1.184	
小・家庭科	0.706	p<0.05
小・中学校家庭科	1.250	
小・中・高校家庭科	1.556	

表9 水量の設定について

	洗濯機まかせ	洗剤容器の表示や洗濯物量に合わせる	有意差
小・家庭科	82.4%	17.6%	p<0.01
小・中学校家庭科	86.7%	13.3%	
小・中・高校家庭科	50.0%	50.0%	

### 3-2 柔軟剤の使用について

柔軟剤や漂白剤などの洗濯仕上げ剤の学習は、学習指導要領によれば、小・中学校の家庭科では取り上げる項目に入っておらず、高校の家庭科で学習する内容となっている。大学生が柔軟剤についての知識をどの程度もっているかを確認したところ、正解である「肌触りをよくする」は92.5%、「静電気の発生を抑える」は16%であった。不正解の「繊維の傷みを修復する」は21.7%、「吸水性をよくする」は11.3%であった。本来の柔軟剤の役割と考えられてきた「肌触りをよくする」や「静電気の発生を抑える」以外に、最近では、「香りをつける」ことが柔軟剤を使用する目的になっている。今回の調査においても、85.8%の学生が柔軟剤の役割として、「香りをつける」を選択していた。「香りをつける」ことを意識するあまり、標準使用量を超えて使うことが問題として指摘されている。柔軟剤の使用は、「吸水性」を低下させるばかりではなく、「香り」が不快であると感じるケースもあるため、標準使用量を限度と考えて使うことが重要である。

柔軟剤使用の有無を質問したところ、84%が柔軟剤を使用していた。χ<sup>2</sup>検定を用いて、柔軟剤使用の有無と、学生の属性との関係を調べた結果、家庭科の学習経験(校種別)の関与は認められなかった。これに対し、表10に示すように、「女子学生」および「家族が洗濯している学生」の場合に、柔軟剤の使用率が有意に高いことがわかった。「家族が洗濯している学生」の9割が女子学生であることを考えると、柔軟剤使用の調査結果には女子学生の影響が強く反映されていると考えられる。

「洗剤や洗濯に関する知識」および「洗剤購入時の意識」が、柔軟剤使用の有無にどのように関わっているかを相関分析や回帰分析で検討したが、明確な関係性は認められなかった。

表10 柔軟剤の使用について

	使用せず	使用する	有意差
男	32.0%	68.0%	p<0.05
女	10.7%	89.3%	
自分で洗濯	23.6%	76.4%	p<0.05
家族が洗濯	6.7%	93.3%	

## まとめ

本研究では、大学生の洗濯行動に影響を与えている要因を分析し、次のことが明らかとなった。

- 1) 洗剤購入時の意識を調べたところ、大学生は、環境や安全性(成分／使用量が少ない／肌にやさしい／環境にやさしい)よりも、洗剤性能(汚れ落ち／香り／抗菌防臭)を重視していることがわかった。
- 2) 小・中・高校の家庭科で学ぶ洗濯に関連する知識や、洗剤購入時に洗剤性能を重視する意識は、「自立した洗濯行動」(自分で考え工夫して適切な洗濯ができること)に必ずしも結びついていない。自立した洗濯行動に、知識が関与していなかった背景には、家庭科で学習した知識を確認するための実習・実験を行う機会が少ないためではないかと推察される。
- 3) 「自立した洗濯行動」には、「小・中・高校までの全ての家庭科で学習した経験」や「性別(女子学生であること)」の関与が認められた
- 4) 8割以上が「香りづけ」を柔軟剤の役割としてあげており、近年の消費者志向に一致する結果となった。知識や意識、家庭科で学習した経験は、柔軟剤を使う行動には関与していなかった。  
今後の課題としては、小・中・高校の家庭科で学習する経験の中身(実習や実験など)を明らかにして洗濯行動との関連性を分析すること、性別(女子学生)の影響を明らかにすること、などが考えられる。

## 引用文献

- 菊池英明・生野晴美. 2014a. 「中学生の洗剤の選択に関する実態と課題—柔軟剤との相違点と洗剤の液性に着目して—」. 日本家庭科教育学会 2014(平成 26) 年度例会. 東京学芸大学.
- 菊池英明・生野晴美. 2014b. 「中学生の洗剤・漂白剤・柔軟剤の選択に関する実態と課題」. 日本家庭科教育学会第 57 回大会. 岡山大学
- 日本石鹼洗剤工業会. 2013. 『ドラム式洗濯機ユーザーの「洗剤計量に関するインタビュー調査」“なぜ洗剤を少なめに使ってしまうのか”』. 日本石鹼洗剤工業会洗たく科学専門委員会委員長 山田勲.  
[http://jsda.org/w/01\\_katud/sentakuchosa2013.html](http://jsda.org/w/01_katud/sentakuchosa2013.html) (引用日 2015/09/10)